泉鏡花『高野聖』論

――異界の二面性を中心に――

福原　恵美子

序論

『高野聖』は明治三三年二月『新小説』に発表され、泉鏡花の代表作の一つとされている。本稿においては婦人（おんな）の母親的一面と共に魔性の力を持つ妖女としての姿、妖怪としてではなく山の霊に通じる神秘的な面を探り、婦人を生み出した飛騨の山々の神的存在、その領域である異界について考察していこうと思う。第一章では鏡花の生い立ちから『高野聖』の成立までの経緯、また素材論、構成の視点から作品の組立てと異界の構造を論じ、さらに手法の面から現在と過去の交錯による効果を検討してみたい。第二章では婦人を中心に僧、白痴（はくち）などの登場人物の役割と異界との関係を考察し、第三章では異界に描かれているものに注目し、魔的なものとしての魑魅魍魎、聖的なものとしての白桃の花や谷川の水、十三夜の月を取り上げて、果たして異界が魔界であるのか聖域であるのかを探っていきたい。

本論

第一章　成立と構成

第一節　成立（省略）

第二節　素材

『高野聖』の素材については、未だ決定的な論は出ていない。代表的な説の一つは吉田精一氏の述べている[1]『板橋三娘子』[2]である。松原純一氏は加賀白山の畜生谷伝説や、全国的に分布している「旅人馬型」の民間伝承、『加越能三州奇談』などを紹介している[3]。

私は十回の「南無三宝、この白い首には鱗が生えて、…引いて出よう」という描写が、『警世通言　第二十八話　白娘子永鎮雷峯塔』[4]、また上記の話を典拠とした『雨月物語　蛇性の婬』[5]の白蛇を思わせたので、この二作品と『高野聖』の類似点を挙げてみたい。

『白娘子永鎮雷峯塔』の許宣と白娘子、『蛇性の婬』の豊

雄と真女児(まなご)には、『高野聖』の僧宗朝と婦人の設定に共通点がみられる。主人公が生真面目一方の性格である点、また、許宣、豊雄が女の正体は妖怪ではないかと疑いつつも、女の色香に迷って夫婦になるのが、僧も婦人の不思議な力を目にしていながら、一緒に暮らそうかと迷う点などが挙げられる。許宣が僧になり大往生を遂げた点も、僧が後に「宗門名誉の説教僧」[三]になるのに似ている。

女主人公は容姿が花に例えられる美女であり、かつ恐ろしい妖怪であるという裏の顔を持っており、一度怒ると本性を現わし襲いかかるところに類似点を見ることができる。また、白娘子や真女児が主人公を脅迫する場面で、「町を全部血の海にして、一人残らず大浪に呑まれ、濁水に沈んで」「君が血をもて峯より谷に灌ぎくださん」と言っているのは、『高野聖』の八・九回で僧がイメージする代がわりの情景にヒントを与えていると考えられないだろうか。僧が婦人の正体を知った後、雷が鳴り驟雨(ゆうだち)が降るが、白娘子や真女児にも同様な現象が起こっており、妖女の正体がばれて姿を消すときに、雷が鳴り大雨を伴うところに共通点がある。

『高野聖』の素材といわれる作品は、それぞれ鏡花が知っているだろうもので、どれも素材となった可能性はある。鏡花が知っているだろうもので、どれも素材となった可能性はある。鏡花が幼い頃より聞き知っていた口碑伝説や、それまでに読んだ話の中から鏡花が好み、選んだものに独自の彩色をしたものが『高野聖』であれば、一作品を素材とすることは難しく、鏡花の意識の中に蓄積された種々の話が素材であるといえよう。

第三節　構成

笠原伸夫氏は、『高野聖』の構造を「入れ子型構造」としているが、[6]この説を私なりに図示してみると、図1のようになる。

図1

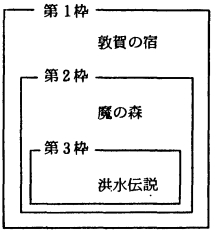
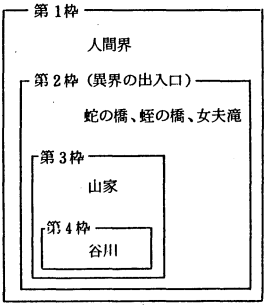


図2



笠原氏の説を幻想性、怪異性に注目して応用改良してみよう。（図2参照）第一枠を人間界とし、敦賀の宿、麓の茶店、医者の邸のあった藪などが含まれる。第一枠と第二枠の境には、異界への入口としての「大鰻を捏ねたような

根」と「一筋の水」[四]があり、出口には激しい滝の流れがある。第三枠は婦人の住む山家で、かつて白痴の村があった所である。新たに谷川を第四枠として設定し、これらの枠も内側へ行くほど幻想性、怪異性が強くなり第四枠の谷川は最も異界的な空間である。

僧は第一枠から第四枠まで行き、そこから無事に第一枠へと帰ることができた。婦人も白痴も親仁も、一度はこの第一枠から第三（四）枠へ進んだことがある。また、僧が若い頃に体験したことを年月がたった今、聞き手である「私」が正反対の季節に白い道の果てにたどり着いた宿で、僧の話を聞くことで疑似体験する。「私」は僧の話に次第に引きこまれ、若き僧に自らを重ねることで異界の恐怖や妖美を身近に感じ、緊張感は高まっていく。

第四節　手法

「私」が僧の話に引き込まれるのと同じように、読者もまた妖力の支配する世界に魅入られる。しかし、読者が正に物語の中に同化しようとする瞬間、合の手のように現在の僧の動作や言葉が挿まれ、読者の意識を冬の「香取屋」へ引き戻してしまう。小説の前半、十五回までに多く見られる文末での合の手は、主に僧の感想や、「私」に話しかけることによって、その回の区切りをつけている。僧の言葉によって、「私」や読者は現実に引き戻され一息つくのである。文中では、その前後で何か重大な出来事が起きている場合が多い。六回の文中「とお前様…これからじゃが」の後で、最初の難関である蛇の橋が僧を待ち構えている。文頭に僧の言葉があるもので、二十三回での僧の中断は「私」や読者を焦らし、次に起こるであろう怪奇な出来事を予想し、期待させる効果がある。最後に話を中断するのは、聞き手「私」自身である。この今までにない中断は強い印象を与える。

僧の話を初めのうちは文末で、比較的短い言葉、僧の感想的なもので区切りを付け、中頃から文中で話を中断し、前後に起こる妖しい事件をより印象的にし、最後には二十五回から二十六回にかけての今までにない聞き手からの中断により、決定的な瞬間を作り出し、さらに婦人の過去を書き連ねて終局へと向かうのである。このような手法は「香取屋」の現在と、山奥の過去という二つの時間をもつ構造を効果的に利用し、作品全体の調子を整え、緊張感を保つのに成功しているといえよう。

第二章　登場人物の役割

第一節　婦人（おんな）

鏡花の小説中の美女達は作者の分身である主人公にとって母親であり、姉であり、恋人である。鶴田欣也氏は婦人「ケア・テイカー（世話する者）」とし、白痴（ばか）を「主人公のドッペルゲンガーの役」を持つ者としている。『清心庵』[7]の主人公が十八歳で、なお幼児性の抜けない頼りない感じ

で、女主人公の世話を受けているのは、『高野聖』の白痴に通じるものがある。しかし、幼児のような言動をする主人公が、一方で語り手として「予は…ぬ」などと話を進める不自然さがある。それに対して『高野聖』では、婦人の赤子に見せるような優しさを、二十四歳とはいえ白痴に向けさせることで、語り手である僧に向けられる優しさを不自然に感じないようになっている。

また、婦人には「魔神」[二十六]と言われるような不思議な力を持つ妖女としての一面がある。十六七の頃から病人を治す婦人の神通力は、「初手は若い男ばかり」[二十八]効力が現れるところを考えれば、決して聖なる力ではなかったと思われる。親仁の「うまれつきの色好み、殊に又若いのが好じゃで」[二十六]の言葉も頷ける。そして、今では男達を「より取って、飽けば、息をかけて獣にする」[二十七]までになり、獣に対して「人の足なんか搦まって、贅沢じゃあないか」[十三]と、もはや人間扱いしていない。婦人は「魔的界域の支配者」[8]であり、婦人の命令は絶対で、拒否されれば立ち去らなければならない。

十九回で妖力を使う婦人の姿は、まるで巫女が神々に祈り、トランス状態に入っているようであり、山の神も婦人の美しさと妖気の込められた祈りに応えるように、山の霊力を婦人に注ぎ込んでいるかのように、「深山(みやま)の気が籠る」[十九]のである。『高野聖』には、「山の霊」[七]「山の気」[十五]というものが度々登場するが、婦人は山の霊、山の神に寵愛を受ける巫女のようにも思える。婦人の誕生にも山の霊が作用し、親に似ていない美女に成長すると山奥に招き入れられ、用済みになった村は滅されてしまったと考えることができる。山の奥に籠ることによって、婦人は妖力を自在に操るようになり、山の中で婦人は思うままに生きることができる。というよりも、山の中でしかこのような生活はできないし、山の霊気に包まれ、谷川の水を浴びていなければ、美しさや妖力は保てないのである。

第三節　僧

異界に迷い込んだ若い僧には、昔物語に出てくるような法力で妖怪変化を退治する高僧のイメージよりも、幼い頃同年の従姉や年上の娘達に可愛がられた鏡花の姿がある。また、僧は鏡花の理想である女主人公に愛される青年の要素を備えており、色白で賢く、優し気で、どこか女性が世話したくなるタイプである。

この僧は師匠の厳しい教えもあってか未だ俗世に汚れておらず、少年特有の潔癖さが残っている。僧の生真面目さや、少年のような素直さ、優しさが婦人の心を捕らえ、獣に変えられなかった理由の一つであろう。もちろん婦人に対して全く何も感じなかったわけではなく、身体を洗われて「血が沸いた」[十五]りする。また、谷川で婦人と暮らそうと思う僧の深層心理には、婦人に引寄せられ傍にいたいと願う獣達と同じ欲望がある。

前田愛氏は「主人公の宗朝が山中の美女を祭司として

『俗』から『聖』に浄化される」と述べているのに対し、[9] 東郷克美氏は「話の聞き手である『私』自身の目が…語りの秘儀によって浄化された」と述べている。[10] 私は、若い頃異界の妖しい美しさや恐ろしさを体験し、山を駈け下りて逃げた僧が、今その誘惑や恐怖を克服し、逆に坂道を上って行く。つまり、異界の体験が即僧を浄化したのではなくても良い、僧の話を聞いた「私」以上に実際に苦難を乗り越えた僧の浄化が勝っていると考えたほうが妥当と思える。鏡花の理想の女性像を託された婦人に好意を持たれる僧も、年を重ねて適当な明るさと人間の厚みを持つ高僧も、鏡花の望む男性像であると思われる。

第三節　その他の人物（省略）

第三章　異界の中の聖と魔

第一節　魑魅魍魎と蛇のイメージ

ここでは「恐ろしい魔所」と言われる山中の世界の聖と魔について考察してみよう。まず異界の中で魔的存在といえる蛇や蛭、その他多くの魑魅魍魎を中心に検討してみる。

私が異界の出入口を旧道と女夫滝の辺りからとしたのは（第一章第三節）、僧が旧道へ入ってから翌日の滝の場面まで、蛇や獣など様々な生物、魔的イメージが描かれているからである。初めは「小さな虫」[六]が飛ぶ程度だが、蛇や虫の死骸が現れ、道の状態は不気味さを増していく。次に蛭の林に遭遇し、蛭は蛇のときと違い、僧に身体的苦痛をもたらす。そして、旧道に入り蛇の橋、蛭の林と次第に異常な事態になった僧の前に人家が現れ、異界からの脱出かと思わせて、その実さらに異界の奥へと入り込んで行くのである。

蛇や蛭に比べると気味の悪いものではない蟇や大蝙蝠や猿の婦人に対する行為は、婦人への執着が消えず、新たに現れた若い僧の目の前で見せる一種の性的行為である。次に現れる馬は、より人間の生活に密着した動物だが、実は僧が朝会ったばかりの薬売りの成れの果てなのである。夜中になると異常さは頂点に達する。婦人に言い寄り獣にされた男達が床に着いた婦人に夜這いをかけるように集まってくるが、家の中に客として僧が居るのを知って動揺し、家をも揺らすのは恐ろしいが浅ましくもある。このように、小さな虫から始まった異界の道は徐々に怪奇性を増しながら魑魅魍魎の群がる婦人の家へと続くのである。

こうして僧は異界へと迷い込んで行くのだが、僧が異界を通る道全体に蛇を暗示するものがある。大鰻のような根から始まり、蛇そのもの、「大蛇（おろち）の蜿るような坂」[七]などから、「激しくのたうちまわる蛇のイメージを連想させる」と指摘される[11]翌日の滝まで異界の力が及ぶ範囲には、蛇をイメージさせるものが存在している。また、異界の入口に大鰻の檜、谷川の入口には蝮（うわばみ）の松があるのは興味深い。異界と、異界の中のさらなる異界を暗示している道標ともいえる。

僧にとって蛇は「生得大嫌、嫌というより恐怖い」[六]ものであり、あまりの恐怖に目を逸すこともできず、魅入られたようにその姿が目に付いてしまう生物である。それは白娘子や真女児が男を魅了する妖美さを持ち、かつ三尺あまりの大蛇であるように、恐ろしい本性を含んでいる異界の中の魔的部分の象徴であると考えたい。

第二節　白のイメージ

ここでは異界の中の聖的存在として、白色で形容されている「白桃の花」[十六]と谷川の水、そして十三夜の月について考えようと思う。

僧と婦人の心の交流の象徴が、僧が婦人の姿を例えた「白桃の花」である。「白」は清浄で神聖なイメージがあり、「桃の花」には華麗で艶やかな趣がある。もともと桃には邪悪を防ぐ力があると言われており、「桃の弓」は破邪のために追儺の時、鬼やらいの料として使われるほどである。僧の素直な感嘆の念は白桃の守りとなって、以後僧と婦人の心のつながりとなる。

それに対して、もう一つの花である紫陽花は良いイメージではない。「色も鮮麗(あざやか)に蒼」[二十二]い紫陽花の陰から馬を見てきた親仁が現れたり、夜中に鳥の羽ばたく音がしたりと、紫陽花の向こう側には何か良くないものが存在しているようで不気味である。蒼が谷川へ行く道は「かの紫陽花のある方」[二十二]ではなく、そこで出会う花は「白桃の花」であった。もし僧が獣に変えられていたら、今度はあの紫陽花の花の向こう側に行かねばならなかっただろう。

次に「真白に翻」[十四]る谷川の水や、「白布を織って矢を射るように」[二十四]流れ落ちる滝の水など鏡花が白色で描く水について考えてみよう。異界の入口には梅雨の為にできた川があり、山家の裏の崖下には谷川の霊水があり、異界の出口には女夫滝がある。水によって異界に誘われた者は、山の神の巫女ともいうべき婦人によって谷川へ導かれ水の儀式をうける。谷川の源は森の奥にある滝で、山の一角から放出された山の霊気を含む水である。儀式の結果、邪心を持つ者は獣に変えられ、持たない者は霊力の恩恵を受けることができる。邪心とは婦人に対する性的欲求であり、それは山の神の巫女を人間の男が恥辱し、支配しようとすることであり、山の神、つまり自然の神聖で神秘的なものを支配し冒瀆する行為である。山に入った者は山の法則に従わねばならず、法則を守らねば制裁を受けるのである。

最後に、婦人の裸体を美しく照らすのも白い月の光である。十三夜の月は幾度も場面に現れ、次第に高く昇り、美しい婦人の姿や、多くの魑魅魍魎を照らす。月は天にあって地上にある全てのもの、異界の中の聖の部分も魔の部分も隔てなく照らし出している。また月は山に属するものではないので、山の法則に縛られることはなく、空から見下している。しかし、やはり異界の月は異界の影響を受ける存在で、「妖気を籠めて朦朧とした月あかり」[十九]と、婦人の妖力に冴々とした月光も圧されて霞んでしまう。異界の聖

にも魔にも属さぬ存在である月が、魔的な力に圧倒されるのである。このことから、月は山の聖にも魔にも属さないものの、聖的存在に近いものと考えることができる。

以上のように異界における聖的存在を白のイメージで、魔的存在を蛇のイメージで表現し、異界の出入口には白のイメージの水と、蛇をイメージさせる根や滝が配されている。さらに異界全体に白と蛇のイメージを交互に、あるいは絡み合わせることによって、妖しくも美しい異界を構成しているのである。

結論

蛇のイメージと白のイメージは、異界の入口から出口まで重要な場面の前後に登場し、旧道の奥にある魔的で、かつ聖的な世界を暗示している。婦人の住む家を囲むこの世界は、蛇の橋や蛭の林、魑魅魍魎など恐ろしく不気味な魔的部分と、白桃の花や霊水のような聖的部分の混在する、魔界とも霊域とも言い難い、もちろん人間界とも異なる世界、つまり異界である。この異界には母親や姉のように優しい聖の一面と、魑魅魍魎の支配者としての魔の一面を持つ美しい婦人が、醜い姿だが唯一清らかな歌声を持つ白痴と暮らしている。このように、異界はそこに住む者を含めて、聖的なものと魔的なものが表裏一体となって存在しているのである。それは飛騨の山々、あるいは自然界が、神聖で生物を育む一方、一度その力を振るえば、人間の力など到底及びもしない恐ろしい威力を発揮するという二面性に似ている。そして、この山々の神の力を代って振うのが婦人であり、山の神の巫女的存在ともいえるだろう。

この異界に迷い込んだ者で、僧だけが無事に脱出することができたのは、婦人に対して邪心をおこさず素直な心があったからで、僧の聖に属する気質が婦人の聖の一面と共鳴し、異界の聖的部分の持成しを受けることができたのである。山の神の巫女、婦人に邪心を持つ者は、山を、自然を征服しようとする者とみなされ、異界はもう一つの魔的な力を振ってそれに報いるのである。

吉田精一氏は、「一草一石にも、何か神秘の匂いをかぎとらずにはいなかった」と述べている。[12] 鏡花にとって異界は、征服し支配するものではなく、畏怖しつつも身近に感じるものであった。

〈注〉

(1) 「高野聖」『国語と国文学』　昭10・10
(2) 『唐宋伝奇集(下)』岩波文庫　昭63・9
(3) 「鏡花文学と民間伝承と」『相模女子大学紀要』第一四・一六号　昭38・2・10
(4) 『中国古典文学大系　第25巻　宋・元・明通俗小説選』平凡社　昭45・12
(5) 『雨月物語評釈』鵜月洋　角川書店　昭44・3
(6) 「高野聖(一)」『解釈と鑑賞』　昭49・12
(7) 明治三十年七月『新著月刊』に発表

(8) 「高野聖㈡」『解釈と鑑賞』　昭50・1
(9) 「泉鏡花『高野聖』――旅人のものがたり――」『国文学ノート』第一三号　昭50・3
(10) 「「高野聖」の水中夢」『国文学ノート』第一三号　昭50・3
(11) (10)に同じ
(12) 「解説」『歌行燈・高野聖』新潮文庫　昭25・8（昭25・2）